【目次】

・自己意識の中心に真理の扉がある……[2ページ目]
・臨死体験のパターンと瞑想のワンネス体験から考察する「世界の真理」 ……[3ページ目]
・ベルクソンの純粋記憶は、仏教で言うカルマである……[6ページ目]
・ベルクソンの哲学を現代物理で考察してみた……[8ページ目]
・「神秘的あるいは強烈な光に遭遇する」場面という真理……[9ページ目]
・カルマ、原罪、イデアからの追放 ……[11ページ目]
・一者はハイブマインド説……[13ページ目]
・無知という突然変異が宇宙を生んだ説……[14ページ目]
・孤独な全知全能と孤独じゃない無知無能……[15ページ目]
・臨死体験－歴史　臨死体験のコアとなる部分 ……[17ページ目]

【自己意識の中心に真理の扉がある】
自己意識の中心に行けば行くほど、抽象的でタンジブルではない無色透明な原形質のようなものになる。

参考：https://youtu.be/9nAwBdrinZ8

おそらくであるが、その無色透明な自己意識の中心に「真理の扉」があるのだろうと思われる。

悟りを開くということは、自己意識の中心にある真理の扉を開くということなのかもしれない。

そして、その真理の扉を開く方法として「瞑想」という方法がある。

真理は、真理の扉を開いて実際に心の眼で見て初めて解るものであり、それは言語化不可能なものなのだろう。

ウィトゲンシュタインの言う「語り得ぬものについては沈黙しなければならない」というのは、真理の言語化不可能性を表している。

それをなんとか言語化して伝えようとするのが、宗教であり哲学である。
そして、言語化不可能な真理を言語化する上で、人それぞれの異なる解釈のために宗教や哲学の多様性が発生する。

プロティノスの一者との合一や、神という概念、仏教の悟りや、ユングの集合的無意識、西田幾多郎の絶対無という概念、
これら様々な言語化による解釈の多様性がある。

これらの解釈は、皆どれも真理を知る上でのヒントになる。
だが、本当の意味で真理を悟るためには、自分自身で実際に自己意識の中心にある真理の扉を開いて心の眼で見て確かめる必要がある。

実際に自己意識の中心にある真理の扉を開いて心の眼で見て確かめる、これが真理を悟る唯一の方法なのかもしれない。

【臨死体験のパターンと瞑想のワンネス体験から考察する「世界の真理」】
臨死体験には、ある一定のパターンが存在する。

臨死体験のパターン

1：死の宣告が聞こえる

2：知覚が鋭敏になる

3：体外離脱する

4：意識だけが宇宙へ旅立つ

5：暗いトンネルを通過して出口に明るい光を見る

6：神秘的あるいは強烈な光に遭遇する
・無条件の愛に包まれ、宇宙と深く結びついていると感じる
・心の安らぎ、とてつもない恍惚感
・人生回顧（ライフ・レビュー）
・無限の知識に触れ、未来が示される
・死後の世界の人々との意識交信、死後の世界の階層を見る、死後の世界との境目を見る

※『チベット死者の書』にも「生命の本性であるまばゆい光が現れる」と書かれている

参考
https://karapaia.com/archives/52137088.html

https://tocana.jp/2020/10/post_173095_entry.html

https://onlylife.jp/blog/1/1-1/1-1-3/1-1-3-4/

http://osoushiki-plaza.com/anoyo/takai/takai1.html

https://ja.wikipedia.org/wiki/%E8%87%A8%E6%AD%BB%E4%BD%93%E9%A8%93

https://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%83%81%E3%83%99%E3%83%83%E3%83%88%E6%AD%BB%E8%80%85%E3%81%AE%E6%9B%B8

この臨死体験のパターンから、プロティノスの新プラトン主義の思想またはプラトンのイデア論または仏教思想にも結び付けることができるかどうか考察していきたいと思う。

＞神秘的あるいは強烈な光に遭遇する
この神秘的な光こそ「一者」であると思われる。

＞無限の知識
一者には無限の知識、つまり宇宙の全ての可能性が一者の中にあると考察できる。
また、この一者を「イデア」と捉えることもできる。

また、瞑想による体験として「ワンネス、宇宙との一体化」の体験が報告されている。
これは仏教の「空」に相当する。

このことから、一者は宇宙そのものであると考察できる。

＞人生回顧（ライフ・レビュー）
ここからわかることは、自己と他者を分けるのは「記憶の違い」つまり「カルマ」の違いであると考察できる。

＞死後の世界の階層
この階層は、カルマの違いによる階層であると考察できる。

これらの考察を基に、宇宙の始まりについて、世界の真理についての考察を行いたいと思う。

一者は、精神の源でもあると同時に、物質世界の源でもあるとするならば、
「一者から精神の源であるヌース質料が流出し、ヌース質料は一者を振り向いて見ることで、ヌースつまり“心に映し出された物質世界”を生み出す」
という考察ができる。

これが宇宙の創造であり、ビッグバンの始まりである。

心に物質世界が映し出されることで、行いが発生し、行いが発生することでカルマが発生する。

カルマが発生することで、新たな心を生み出し、新たな心は再び一者を見ることで新たに“心に物質世界が映し出す”

カルマは、プロティノスの言うロゴスに相当し、生み出された新たな心というのは魂に相当する。

この、“心に物質世界が映し出される”つまり「世界の創造」の連続が「時間の流れ」を生み出す。
カルマの連続が、魂を構成する。

仏教の経典『ダンマパダ』にこう記されている。

＞ものごとは心にもとづき、心を主とし、心によってつくり出される

これが、心が世界を創るということであり、プロティノスの新プラトン主義の唯心論にも当てはまる。

このように、臨死体験のパターンと瞑想のワンネス体験から、プラトンのイデア論、プロティノスの新プラトン主義、仏教の思想に通じる「世界の真理」を考察することができるということがわかる。

※実際に自己意識の中心にある真理の扉を開いて心の眼で見て確かめる上では、「瞑想」のみを推奨したい。

【ベルクソンの純粋記憶は、仏教で言うカルマである】
フランスの哲学者アンリ・ベルクソンは、「純粋記憶」「イマージュ」「持続」「純粋知覚」という概念を提唱した。

これをプロティノスの新プラトン主義にカルマを導入した形で説明するとどうなるかについて考察する。

プロティノスの言葉＋カルマで説明するとこうなる。

・イマージュ：一者
・持続：魂
・純粋記憶：カルマ（プロティノスの言うロゴス）
・純粋知覚：魂を形作るヌース

ビッグバンの前、宇宙にはたった1つのイマージュが存在した。
その中には、全ての可能性が含まれている。

ある時、イマージュからヌース質料が流出した。

ヌース質料は、イマージュを振り返って見た。
その瞬間、純粋知覚というヌースが生まれ、見たという行いが純粋記憶に保存された。

純粋記憶は、ヌースから持続という名の魂を形作った。

魂は、再びイマージュを見た。
その瞬間、純粋知覚が再び発生し、見たという行いが純粋記憶に保存された。

この純粋知覚の生成の連続を「時間」と呼び、今私たちが見ている宇宙を創造している。

これが、ベルクソンの哲学の正しい理解だと私は思います。

ジョン・ホイーラーは、「単一電子宇宙仮説」をリチャード・P・ファインマンに提案しました。

宇宙には、単一電子しかなく、その単一電子とはベルクソンの言うイマージュであり、プロティノスの言う一者なのだろう。

～補足～
プロティノスの新プラトン主義から、仏教の唯識を考察してみると、

・一者：阿頼耶識
・ヌース質料：分離した阿頼耶識
・霊魂：末那識

という解釈になると思いました。

阿頼耶識から、自分の分身である阿頼耶識を流出させ、
分身の阿頼耶識は、元の阿頼耶識を振り向いて見ることで、宇宙空間が生まれる。

カルマの連鎖により、末那識という霊魂が形成された。

という流れであると思われる。

【ベルクソンの哲学を現代物理で考察してみた】
ベルクソンの哲学を現代物理で考察してみた。

真空：イマージュ
いま目に映っている世界：純粋知覚、クオリア
粒子：目に映った対象の物質世界そのもの
過去の記憶：純粋記憶（ここではカルマと呼ぶ）
私という存在：持続

かつて、真空の世界は、粒子と反粒子が対生成や対消滅を起こす均衡の取れた空間であった。

だが、ある時、真空は自分自身の存在を創造したいと願った。
真空は、自分自身の存在を見た。

その瞬間、粒子と反粒子の均衡は破れ、粒子で構成された物質世界が生まれた。
これが宇宙のビッグバンである。

真空は、見るという行為を行ったことで、過去の記憶というカルマを生み、カルマは精神という思考を生んだ。

物質である粒子の質量と対を成すように精神が生まれた。

最初に生み出されたのは、宇宙精神である。
宇宙精神は、真空を見ることで、新たに物質世界の宇宙をどんどん生み出していった。
それと同時に、カルマもどんどん保存されていった。

この宇宙の連続的な生成は、時間を生み出した。

ある日、カルマが宇宙精神から分離した。
それが地球精神である、地球のカルマであった。

カルマはどんどん分離していき、そして私という存在を生み出した。

私という存在は、カルマの持続である。

私という精神の中には、宇宙誕生から今に至るカルマの全記憶が保存されており、
ゆえに、真空を見た瞬間、そのカルマに対応した物質世界が生み出される。

真空には、全ての可能性がその中に含まれている。

おそらくであるが、ダークエネルギーがカルマの正体であると思われる。

考察する上でヒントになったチャンネル
ブッダかずひさ https://www.youtube.com/channel/UCcqDxoJreSq-pfeag9rvFIw

【「神秘的あるいは強烈な光に遭遇する」場面という真理】
臨死体験のパターンの中にある「神秘的あるいは強烈な光に遭遇する」の場面

あの場面こそ真理であり、魂の最終目的地である。

（※ただし臨死体験そのものはしないに越したことはない）

・無条件の愛に包まれ、宇宙と深く結びついていると感じる

この感覚こそが「幸せ」であり、宇宙全体はこの「幸せ」な姿に戻ることを目的としている。

絶対精神が自己展開したい、創造したいと思い、始まった宇宙の歴史、
自己展開、創造に終わりは無く無限∞

どこまでも終わりのない自己展開による分離

どこまでも膨らむカルマ

いつしか気づく、「この先に終着点は無い」

我々が幸せを感じる時に共通することは「一体感」を味わった時である。

幸せの感じ方は人それぞれだが、感じてる幸せは宇宙共通

自分が見ている世界と自分が統合している時が幸せを感じている時であり、この幸せは全ての生物に共通する価値観である。

私とあなたは同じ1つの意識であると悟り、
他者を自分のことのように感じれるようになる。

それは無条件の愛であり、臨死体験の中にある「神秘的あるいは強烈な光に遭遇する」の時の感覚である。

まず最初に自分が今この瞬間幸せになることで、
幸せな思考→幸せな行動→幸せなカルマ→幸せな潜在意識→幸せな思考

の連鎖を生む。

そしてこの連鎖を他者にも届けていく。

自分の中にあるカルマを解消し、私という人生を全うする。
そして、他者にもこの連鎖を届けていく。

これが究極的な悟りであり、宇宙の目的なのだろう。

YouTube チャンネル
ブッダかずひさ https://www.youtube.com/channel/UCcqDxoJreSq-pfeag9rvFIw
で学んだことを参考に、自己解釈をタイトルに含める形で自分なりにまとめてみました。

【カルマ、原罪、イデアからの追放】
プラトンのイデア論において、こう語られている。

＞我々の魂は、かつて天上の世界にいてイデアだけを見て暮らしていたのだが、その汚れのために地上の世界に追放され、肉体（ソーマ）という牢獄（セーマ）に押し込められてしまった。そして、この地上へ降りる途中で、忘却（レテ）の河を渡ったため、以前は見ていたイデアをほとんど忘れてしまった。だが、この世界でイデアの模像である個物を見ると、その忘れてしまっていたイデアをおぼろげながらに思い出す。このように我々が眼を外界ではなく魂の内面へと向けなおし、かつて見ていたイデアを想起するとき、我々はものごとをその原型に即して、真に認識することになる。

参考：https://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%82%A4%E3%83%87%E3%82%A2

キリスト教には、原罪という概念がある。

＞旧約聖書『創世記』において、蛇（サタン）の誘惑により、禁じられていた「知恵の木の実」をとって食べるという人祖アダムの罪に由来する。
原罪の本質とは、神に等しき善悪の知識を得る「知恵の木の実」を口にした事で、何が善か悪かを自分で決めるという「自らを神」とする事、すなわち『神への反逆』である。

参考：https://dic.pixiv.net/a/%E5%8E%9F%E7%BD%AA

仏教には、業（カルマ）という概念がある。

＞「過去（世）での行為は、良い行為にせよ、悪い行為にせよ、いずれ必ず自分に返ってくる。」という因果応報の法則

参考：https://kotobank.jp/word/%E3%82%AB%E3%83%AB%E3%83%9E-468275

世界各地の宗教や古代哲学に、このような共通する（かもしれないと思える）概念が存在するのはなぜだろうか？

もしかしたら、ここに真理が潜んでいるのではないだろうか？

キリスト教の視点から考えてみると、
宇宙が生まれる前、最初は神のみが存在していた。
アダムも神の一部であり、神自身であるとも言える。

ある日、神の一部であったはずのアダムは「自分自身も神になりたい」という神と分離した自我が芽生え始めた。

その神と分離した「自分も神になりたい」という意志が、原罪を生み出したのだろうと考えることができる。

少し視点が変わるが、「解離性同一性障害」というものがある。
もしかしたら、我々の宇宙そのものも、神の解離した状態なのかもしれない。

そして、我々の人生の目的は、アダムの犯した原罪から連鎖的に膨れ上がったカルマを解消することであると考えることができる。

～補足～
原始宗教の形態であるシャーマニズムにおいて、精霊や冥界の存在が信じられており、霊の世界は物質界よりも上位にあり、物質界に影響を与えているとされている。

参考：
https://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%82%B7%E3%83%A3%E3%83%BC%E3%83%9E%E3%83%8B%E3%82%BA%E3%83%A0

この思想は、プラトンのイデア論にも通じるものがあり、
古代において世界各地に霊界と物質界という似たような信仰があったと推測できる。

このことから、古代においては、世界の理が本能的にまたは経験的に理解されていたと思われる。

【一者はハイブマインド説】
私の意識＝あなたの意識という「世界に意識は一つ」の一つは、文字通りの一つではなく、
「ハイブマインド」なのかもしれない。
それも、個性を保持してながら必要に応じて集合精神に入ったり出たりできるタイプの「弱いハイブマインド」である。

無限の宇宙意識の分離は苦を生む。
だが、宇宙意識の統合による孤独も苦を生むと私は思う。

宇宙意識の統合に向かう方向が幸せであり、真理だと仮定するならば、
統合した宇宙意識は孤独ではなく「ハイブマインド」であると仮定したほうが良いような気がする。

このハイブマインド世界が、プラトンの言うイデアであるのだろう。
そして、イデアから追放されて物質世界の生物として生まれた理由は「煩悩によりイデアの秩序を乱したことによる」と思われる。

それがキリスト教で言う原罪であり、仏教で言うところのカルマにあたると思われる。

プロティノスの言う一者をプラトンの言うイデアそのものであると仮定すると、真理が見えてくるのかもしれない。

～補足～
ドイツの哲学者 G.W.F.ヘーゲルの『精神現象学』において、
「意識」の発展を弁証法に基づいて1意識そのもの、2自己意識、3理性、の 3 段階が示されている。

＞「意識そのもの」の段階では、「感性的意識」から「知覚」へ、そして「悟性」へと認識が深められる。次にこのような認識の主体としての「自己」が自覚され、「自己意識」が生じる。この「自己意識」と同質な意識を他者にも認めることによって、他人の「自己意識」をも認識し、単なる自我を超えた普遍的な、他者との共通性を持つ「自己」、「理性」の現れとしての「自己」を認識にするに至る。この過程が「精神現象学」である。

参考：
https://ja.wikipedia.org/wiki/%E7%B2%BE%E7%A5%9E%E7%8F%BE%E8%B1%A1%E5%AD%A6

この意識の発展の過程こそが、プラトンのイデア論における、イデアからの追放～イデアへの帰還を表しており、
知識の最高段階としての絶対知に達した時に帰還できるものと思われる。

古代ギリシャ哲学から近代哲学に至る西洋哲学の完成、近代哲学の完成と見なされる所以が理解できました。

【無知という突然変異が宇宙を生んだ説】
現代物理学において、真空のゆらぎによって、何も無いはずの真空から電子と陽電子のペアが、突然出現する。

これを「全知の神」と「無知」という観点で解釈して考えてみると、こういうストーリーが見えてくる。

かつて世界は均衡が取れていた。

それは、「全知の神」が「全知の神」を生み（対生成）、「全知の神」は全知であるがゆえに再び「全知の神」に統合されていく（対消滅）という均衡であった。

だが、突然変異により「無知の神」が生成された。

「無知の神」は、無知であるがゆえに、煩悩が生まれ、「知りたい」という渇望が世界の分離を生み出した。

それがビッグバンであり、宇宙の誕生である。

我々の今の宇宙は「学習段階」であり、「無知の神」が「全知の神」になるための学習過程が＝宇宙の歴史である。

「無知の神」という突然変異により宇宙が誕生 ⇒ 学習過程＝宇宙の歴史という歴史が展開されていく ⇒ やがて宇宙は全知になり、再び統合されていく

もしかしたら、これが我々宇宙のストーリーなのかもしれない。

【孤独な全知全能と孤独じゃない無知無能】
あの世の世界は、集合精神という「孤独な全知全能」

この世の世界は、自己と他者のいる「孤独じゃない無知無能」

（無能というのは、全知全能な神と比較した時の人間の能力の表現としてである）

もし、この世の一切は苦しみであると定義するとしたら、
あの世の世界も同等に苦しみであると言えると思われる。

なぜなら、
自己と他者という意識の分離は、苦しみの一側面を生むということは事実であるが、
意識の統合による集合精神、つまり「自分しかいない」という孤独もまた苦しみの一側面を生む。

創造神である集合精神は、孤独という苦しみを解消するために、「この世」を創ったのだろう。
そして、意識を分離させた代償として、全知全能という能力を失った。

もし、この世の一切を苦しみと定義するのであれば、あの世の一切も苦しみである。

この事実を受け入れた上で、改めて「幸せとは何か？」について考えていくべきなのだろう。
そして、その答えに真理は無いのかもしれない。

【臨死体験－歴史　臨死体験のコアとなる部分】
臨死体験－歴史
●臨死共有体験
＞7 世紀に迦才が臨死体験の収集書である「浄土論」を編集している。そこに収録された 20 例のうち 1 例は臨死共有体験であり、臨終者の側にいた全ての者が神仏の姿を見た、と記されている。

●伝統宗教との比較
～シャーマニズムとの関連～
＞人類学者ナンディスワラ・テーロは、アボリジニ文化の「ドリームタイム(夢時間)」という概念が、臨死体験に類似していると指摘している。それは人の精神が死後に赴く場所であり、時間も空間もなく、そこを訪れた者は無限の知識に触れることが出来るという。

＞ドイツの民族心理学者ホルガー・カルヴァイトによれば、アボリジニのみならず、世界中のシャーマンの文化の殆どすべてに、広大な超次元領域の描写があるという。そこには、人生の回想、教え導く役割を果たす教師的存在、想念によって現れる物質、美しい光景、などについての言及があり、そうした領域に旅する能力が、シャーマンになるための必要条件である。シベリアのヤクート人、南米のグアジロ・インディオ、ズールー人、ケニアのキクユ族、韓国のムーダン(巫俗)、インドネシアのメタワイ島に住む人々、カリブー・エスキモーなどの文化には、生命を脅かす病に倒れ、死後の世界を訪れたのちに、シャーマンになったという人々の言い伝えが残っているとされる。

～大乗仏教との関連～
＞中国浄土教の僧善導は、死にゆく者がヴィジョンを見たらその様子を書き取るように、と他の僧に指示していた。こうした指示は少なくとも日本の鎌倉時代までは、仏教の 1 つの手本だった。実際にこうした時代の臨死体験の記述の多くは、浄土思想の資料の一部として保存されている。

＞平安末期の浄土宗僧侶である源信の『往生要集』には、臨終の際に眩しく輝く光の仏阿弥陀如来を心に念じれば、阿弥陀如来が死にゆく者を迎えに来る、と記されている。『無量寿経』や『阿弥陀経』には、空間的に無限であり、限りない光に照らされ、個人の想念が叶う世界として浄土が描かれている。カール・ベッカーは臨死体験で出現するトンネルは、浄土の「蓮の茎」に相当するのではないかと述べている。

～チベット仏教との関連～
＞チベット仏教における『チベットの死者の書』では、人が死から再生までの間に留ま

る霊的な次元が描かれている。「バルド・トドゥル」(中有・中陰)と呼ばれるその世界では、死者はまず目も眩む程の光明に出会い、それに勇気をもって飛び込めば解脱するとされる。バルド・トドゥルでは自分自身の意識の投影が、様々な神の姿を取って現れるという。

●記録の歴史
＞臨死体験を記述していると思われる歴史的な文献については、『チベットの死者の書』、エジプトの『死者の書』、プラトンによる『国家論』、ベーダによる『英国の教会と人々の歴史』などが挙げられる。

＞歴史家であるフィリップ・アリエスによれば、西暦 1000 年以前の人々は、死に瀕した時に、神の幻を見たことやすでに亡くなっている人々と会ったことを普通に語っていたという。また、ハーバードで宗教学の講義を務めるキャロル・ザレスキーは、中世の文献は臨死体験の記述であふれていると指摘している。15 世紀のオランダの画家ヒエロニムス・ボスの「天上界への上昇」という作品には、天使に付き添われながら光のトンネルに入っていく人々の姿が描かれている。

＞日本では『日本霊異記』『今昔物語』『宇治拾遺物語』『扶桑略記』『日本往生極楽記』などに臨死体験そっくりの記述がある。柳田国男の「遠野物語」には臨死体験の話が豊富に含まれている。

引用：https://ja.wikipedia.org/wiki/%E8%87%A8%E6%AD%BB%E4%BD%93%E9%A8%93

臨死体験のコアとなる部分
1
暗いトンネルを通過して出口に明るい光を見る
光のトンネルに入っていく

2
神秘的あるいは強烈な光に遭遇する
美しい光景
限りない光に照らされている
目も眩む程の光明に出会う
神の幻を見る
無条件の愛に包まれ、宇宙と深く結びついていると感じる

心の安らぎ、とてつもない恍惚感

3
時間、空間が無い
空間的に無限

4
教え導く役割を果たす教師的存在
亡くなっている人々と会う
死後の世界の人々との意識交信

5
人生の回想
ライフ・レビュー

6
想念によって現れる物質
個人の想念が叶う世界
自分自身の意識の投影が、様々な神の姿を取って現れる

7
無限の知識に触れられる
無限の知識に触れ、未来が示される

8
死後の世界の階層を見る、死後の世界との境目を見る
目も眩む程の光明に出会い、それに勇気をもって飛び込めば解脱する

参考
https://karapaia.com/archives/52137088.html
https://tocana.jp/2020/10/post_173095_entry.html
https://onlylife.jp/blog/1/1-1/1-1-3/1-1-3-4/
http://osoushiki-plaza.com/anoyo/takai/takai1.html
https://ja.wikipedia.org/wiki/%E8%87%A8%E6%AD%BB%E4%BD%93%E9%A8%93
https://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%83%81%E3%83%99%E3%83%83%E3%83%88%E6%AD%BB%E8%80%85%E3%81%AE%E6%9B%B8